

---

# **カノジョの話　・清実と翔太の場合・**

澤群 キョウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カノジョの話・清実と翔太の場合・

### 【NNコード】

N8468Q

### 【作者名】

澤群 キョウ

### 【あらすじ】

厳しい女上司と、ほんわか男子社員に起きたとある出来事。

定時よりも1時間遅くなつて、ようやく仕事が終わつた。パソコンの電源を落とし、帰りの支度を済ませる。

やれやれ、と立ち上がつたといりで、仕切りの向ひの人物と曰が合つた。

笛本 清実。

36歳独身。僕の、上司だ。

ひづらを恐ろじて顔で睨んでいた。

頭の中で、慌てて形相の理由を検索した。

上司の自分がまだ働いてゐること、お前はもう帰るのか。

いつもじんぐさいお前のせいで、自分の帰る時間も遅くなつてゐるんだぞ。

ひづきメールで送つた報告、ひづらと口頭で云ふに来いやー！

それとも、今日になした仕事の中に、不十分なものがあつたのだろうか。

なにせ毎日あれもこれもイチイチ文句を言われる日々なので、理由はいくらでも挙げられる。

さて、どれが正解だらう。

「あの……」

おそれおそれ、不機嫌の理由を聞いつと口を開くと、清実の眉間に寄ったしわがますます深くなつた。

「うう……」

「」から人外の魔物に変身して襲つてきやうな唸り声が聞こえる。なんとこう恐ろしかる。

そつと、このまま横に歩いて、フードアウトできないだらうか。ゆっくつと、一步後ろに下がる。そして、出口の方へ……一步右。

「須田くん」

般若のような顔から、自分の名前が呼ばれた。

「はい！」

即、返事をした。ハキハキと。若い男性らしく、明朗に。  
「……呼んで」

「はい？」

声が小さい。よく聞こえなくて、思わず聞き返した。いつもなら怒られるパターンだ。

デスクに置いた手を小さく振つておこでおこでしていくので、仕方なく上司の席へを行つた。

「笛本さん、どうしたんですか？」

「……動けないのよ」

横に立つ自分の方を向かず、まっすぐ前を向いたまま答えた。

「ぎっくり腰みたい」

「え？」

「ぎっくり腰！」

搾り出すような声で、そう告げられた。

清実は座った姿勢のまま動かない。

あまたの戦を勝ち抜いてきた伝説の司令官の真似、などではなかつたらしい。

翔太の想像する「ぎっくり腰」のイメージそのままに、清実は座つた姿勢のまままったく動けなくなってしまったようだ。

「タクシ－、呼んで欲しいんだけど

「救急車の方が良くないですか？」

「大丈夫よ、タクシーで。ついでにこの近くにまだやつてる整形外科がないか調べてくれない？」

はあ、と返事をして、上司の頼みを聞くことにした。

もう残っている人間は近くにいない。自分が「いや、もう帰るんでも」なんて言つたら、彼女はこのまま何時間も、最悪明日の朝までここに座り続ける羽目になつてしまふ。苦手な上司とはいえ、さすがにそこまでの仕打ちをするわけにはいかないだろう。

自分の席に戻つて、再びパソコンの電源を入れた。

インターネットのブラウザを立ち上げ、タクシー会社の番号と近所の整形外科を検索する。

一番近いのは、塚山整形外科。診療時間は20時まで。気の利く医院だ。休診日ではないことも確認して、目の前でしかめつ面をしている上司に報告した。

すぐにタクシーも呼んで、また電源を落とす。

並んだ机の列をぐるっとまわって、清実の元へ戻った。

「 笹本さん、タクシー呼びましたよ」

「 ……ありがとう」

唸るような礼を言われ、そして気がつく。

「 カバンとか、どこに置いてますか？帰る支度しないと」

清実は一瞬、顔をしかめたように見えた。が、小さなため息をしてすぐに言つた。

「 お願いしていい……？」

「ええ、大丈夫です」

机の一番下の大きな引き出しに渋めの濃い赤色のカバンが入っていた。

そこに手帳やら携帯電話やら、指示されたものを入れていく。

カバンの中がちらちらと目に入る。

中は持ち主のイメージと相反して、可愛らしいピンクやイエローの小物がたくさん入つていて、

女性のカバンの中身を見るなんて、しかも恋人でもない人間に見られるなんてイヤだよな。

丁寧とはいえないが、プライバシーに配慮して物は適当に入れていく。

後で文句言われてもまあ仕方ない。まじまじと中を見られるよりはいいはずだ。

「 電源落としても大丈夫ですか？」

「 いいわよ

カバンを机の上に置き、パソコンの電源も落とした。これで準備は万端だ。

あれ。そういえばこの人は自分で歩けるのだろうか？

「笛本さん、1階まで行けます？」

「手、貸して」

「ええ、もちろん貸しますけど……」

手を出すと、清実は腕をガツシリとつかんできた。  
ゆっくりと立ち上がる。

どうやら固まつたまままつたく動けなくなつたわけではないらしい。

小さな唸り声をあげながらじわじわと立ち上がっていく。  
苦しげな顔を、どこかで見たような気がした。

そうだそうだ。2体セットの仏像かなにか。あうん、だつたかな。  
あれと似ている。

まるでコントで芸人がやる老婆のような動きで、なんとか歩いて  
いる。

そんな上司の分のカバンも持つて、いつもの3倍くらいの時間を  
かけてようやく1階にたどり着く。

玄関のドアの前には、既にタクシーが止まっていた。  
外でキョロキョロしている運転手に、手を擧げる。

じちらの様子を見て事情を察したのか、運転手は中に入ってきた  
移動を手伝ってくれた。

なんとか後ろの席に乗り込ませ、塚山整形外科へ行くように頼む。

「お姉さん、もしかしてギックリ腰！？」

運転手は少し愉快そうに声をかけてきた。その口は即、世にも恐ろしい顔で黙らされる。

タクシーはすぐに目的地に到着した。  
「ここで待つてた方がいいかな？」  
「ああ、その方がいいですよね」  
「混んでなかつたら……お願ひするわ」  
「じゃあ僕が、確認してから伝えに来ます」  
「わかったよ。じゃあよろしく」

よろしく」と言つたが、運転手は「いやいやせっぱり俺も」と言ってまた手を貸してくれた。

ついでに病院の中までついて来て、待合室で笑顔を見せた。

「誰もいないじゃないか。じゃあ、すぐに終わるかな？下で待ってるよ」  
気のいい運転手がいたものだ。お客のためにこんなにサービスしてくれるなんて、偉いな。

「ありがとうございます。じゃあ、お願ひします」  
礼を言つて、よかつたですね、と声をかけた。  
もちろん、笑顔で「そうね！」なんて言つてはこない。

やつてきた受付の女性に、保険証の提示を求められ、清実はあるでロボットのような動きでカバンを探つてくる。

「あの、どこに入つてるんですか？僕が出しますよ」

「うう……」

返事は唸り声だ。

清実は顔を真つ赤にして、最後に「サイフの中」と言つた。

サイフを探す。ちょっとテカテカしたパールピンクの長財布をつけ、失礼します、と開いた。

中には無駄なものは入つておらず、整然としている。

自分のと同じタイプの保険証はすぐに見つかり、受付の女性に渡すことができた。

勿論サイフはすぐに閉じて、元の位置に戻す。

簡単な問診表を書き終わると、すぐに診察室へと呼ばれた。

看護師がドアを開けてくれたので、また手を貸して一緒に移動する。

中年の男性医師の前に清実を座らせ、さすがに同席するのはおかしいなど待合室に戻った。

もちろんもう帰りたい。

しかし歩くのもままならない女性を、しかも自分の直接の上司を置いて帰つたりしたら、また「このゆとり世代が」と言われるのには必至だ。大体そこまで、薄情者ではないのだ。

誰もいない待合室は静かで、診察室の声がはつきりと聞こえてきた。

「あつはつはー・ギックリ腰だねー！」

今どんな顔をしているだろ？ また、般若のような顔になつていないうちうか。

まあいつだつてプリプリ怒つていて、近いものはあるけれど。

少しして、看護師に支えられた清実が出てきた。

顔は、やっぱりムカついている表情だ。

気を利かせて、受付で処方された湿布や保険証を受け取る。ついでに新しく作られた診察券を受け取り、診察料もかわりに払つた。

「さ、行きましょ？」

また手を貸して、待たせているタクシーまで移動する。  
これで自分の役目は終わりだ。

いや、確かに笹本さんは一人暮らししだった気がする。そんな話を誰かに聞いた。

去年長い間同棲していた彼氏に逃げられて、今は一人なんだと。家族が待っているなら、そっちに連絡するだろ？。それをしないということはやっぱり一人で間違いない気がする。

鍵を開けようとして転んでひっくりかえったまま動けないと、そういう悲しい状況だつてありえる。

この気のいいタクシーの運転手なら手伝ってくれるかもしぬないが、見知らぬ男よりは、いつもともに仕事をしている部下の方が少しは安心感があるだろ？。

せめて無事に家中に入るくらいまでは、手伝つてあげた方がいいはずだ。

紳士の行いだな。これは。

タクシーと一緒に乗り込んで、隣に座る。

ちょっと怪訝そうな顔で、清寒がこちらを見ていた。

「須田くん、もういいわよ。帰つて」

「いえ、家まで行きますよ。1人じゃ大変じゃないですか？」

いつもは厳しい女上司の顔が、なんとなく赤らんだ気がした。しばらくして、ようやく返事が返ってくる。

「そう。じゃあ、頼むわ」

「はい！」

返事はハキハキと。そして相手のことを考えて気を利かせ。

いつも清実に言われていることだ。今日はしつかり実践している。

レンガの外壁が少しオシャレなアパートの前でタクシーが止まつた。

代金をまたかわりに支払つて、車を降りる。

「部屋はどこですか？」

「203号室」

2階建てのアパート、エレベーターはないようだ。

「良かったですよ、一緒に来て。階段なんて1人じゃ危ないですよ」

またカバンを2つ持つて、上司に肩を貸す。

ゆっくりと階段を登りきり、203号室へたどり着いた。

清実はなんとか鍵を開けようとするが、痛みがあるのかなかなかうまくいかない。

「僕がやりますよ」

肩を貸したまま、鍵を差し込んでドアを開ける。

「もういいわよ。帰つて」

「そんな。ここまで来たんですから、最後までお手伝いします」

すぐ横から、また小さな唸り声がした。  
氣の毒に。よっぽど痛いんだな。

ドアを開けて、中に入る。

薄暗い中に小さいランプが見えたので、これが電気のスイッチだと判断して勝手に押した。

明かりがついて、部屋の中が明るくなつた。  
玄関のすぐ横にキッチンとダイニングがある。その奥に、もう一部屋あるよつだが……。

一瞬でさつきの「帰つて」の本当の意味がわかつた。

部屋の中は、可愛らしい薄いピンクがあふれかえっている。ソファカバーには、無駄じゃね?といいたくなるくらいの量のフリルとリボンがついており、そこかしこに可愛らしい女児向けのうさぎのキャラクターのぬいぐるみが置かれていた。

奥にある部屋にもあかりが差し込み、おそらくスーパーファンシーワールドが広がっているであろう予感をさせる。だつてまず、そこに見えているベッドときたら……。

思わずそちらに気をとられていると、横で清実がドカンと大きな音をさせて倒れた。

「あっ! 笹本さん、大丈夫ですか! ?」

「大丈夫! 大丈夫! !」

慌てた様子で、でもすぐに「ぐわあ」と声をあげて悶絶した。

もしかしてこの部屋を見られたくなくて、焦つたんだろうか。確かにこの部屋、いつもは「鬼軍曹」とか「冬將軍」とか呼ばれている清実とは縁遠いイメージだ。

恥ずかしいんだな。

可愛いところ、あるじゃないか。

つい、一やけてしまつたようだ。

こちらの顔を見て、清実は叫んだ。

「帰れ――――――――! ! !

「失礼します」

と一言言つて、急いで部屋を出た。

ドアを閉める前に、ひとつ思い出す。

「あの、湿布自分で貼れますか？」

「黙れっ！！」

「はいー。」

慌ててドアをしめた。

鍵、自分で閉められるだろうか。

心配だつたが、これ以上口出ししたらいけないかなと思つて、さつきタクシーで通つた時に見えた最寄駅に向かうこととした。

その後恐ろしい女上司は2日会社を休み、週明けに少しきこひない歩き方で出社してきた。

ぎこちない歩き方で、まず行つたのは部長のところだ。

そして次に、怖い顔をして自分の向かいの席……つまり僕のところにやつってきた。

「おはようございます、笹本さん」

「おはよう須田くん。先週は迷惑かけたわね」

「いえ……もう、大丈夫なんですか？」

「もう平気よ」

その割りに、ちょっと口ボットの真似みたいな歩き方だけど。まあ1人で歩けるなら大丈夫か。

「「」れ、お礼」

「うう言つて、紺色の紙袋を渡される。  
じつやうお菓子のようだ。

「お礼なんてそんな、いいですよ」

「いいのよ。助かつたし」

そこでちゅうと、照れたような顔で下を向いた。  
それを見て、閃く。

「大丈夫ですよー。誰にも言つてしませんから」

「何をー?」

「あー。えーっと」

「言わなくていい!」

歯をグワッとむき出しにして、砲えるように言られた。  
確かに言つたら意味がないな。

勿論、せつくり腰になつたことも、夢の國のお姫様のよつた部屋  
に住んでゐる事も、どちらも誰にも言つてない。きっと知られたら  
恥ずかしいだらうから。配慮配慮!

昼休みに、もらつたお菓子を食べてみることにした。

綺麗な包装紙とリボンに包まれた、立派なお菓子だ。

開けてみるといろんな種類の焼き菓子が入つてゐる。丸い筒状の  
お菓子を一つ食べてみると、今まで味わつたことのない美味しいさだ  
った。さすが、高そうなだけはある。

「笹本さんー、これものす」に美味しいですよー。」

立ち上がって、向かいの上司にお礼を言った。

清実はまた少し怒った顔で、シーツと人差し指を口に当たた。しかしこの声は周りに聞こえたようすで、同期や仲のいい先輩たちにお菓子を分配するはめになってしまった。幸せのおすそ分けつてやつかな。みんな喜んでくれたから、よしとしよう。

相変わらず僕は、笛本さんの下で仕事をしている。他人に厳しく当たつてこるとこりをよく見かけるが、あの可憐らしい部屋に住んでいると思うともう以前のように恐ろしく感じじることはなかつた。

仕事の鬼だと思つていたのに、中身は可憐らしい少女なんだ。

そう考へると、毎日怒つてこらのもなんだか照れ隠しのよつて思えてしまつ。印象が変わつたおかげで、少し憂鬱に思つていた仕事もなんだか楽しくやれるよつになつてきた。

あの日の、ギックリ腰のおかげだ。やつぱり人には親切にすべきだよな。

最近では笛本さんからもほとんど怒られなくなつた。  
もしかしたら僕もいよいよ、仕事のできる男になつたのかも知れない。

その後クリスマスに、笛本さんからショーオンのついたディナーへ誘われた。

もちろんお断りだ。

「彼女との約束があるので」

年が明けてから、 笹本清実はそれまで以上に仕事に打ち込むようになつた。

その後部長に昇進し、更に出世街道を進んでいくことになるがそれはまた……別な話ということだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8468q/>

カノジョの話・清実と翔太の場合・

2011年3月30日08時01分発行